大和の文化遺産を学ぶ② －盧舎那仏に捧げられた正倉院宝物

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

コロナ禍に明け暮れた今年も、奈良では恒例の正倉院展が開催される季節を迎え、すっかり秋が深まっている。思えば昨年の正倉院展は、新天皇の即位を記念して、代表的な宝物が顔を揃える特別な内容で開催され、東京国立博物館でも「正倉院の世界－皇室がまもり伝えた美－」として、宝物の献納リスト『国家珍宝帳』などの宝物41件が特別に展示されたのだった。昨年の正倉院展でとくに印象深かったのは、『国家珍宝帳』の冒頭から２番目に記載された「赤漆文欟木御厨子（せきしつぶんかんぼくのおんずし）」だった。天武天皇から持統・文武・元正・聖武・孝謙へと、代々の天皇に伝えられたこの厨子は、飛鳥浄御原宮から藤原宮を経て、平城宮へと運ばれ、７世紀後半以降の激動の歴史を見守った大切なもので、厨子の棚には聖武天皇が座右に置いた遺愛の品々が納められていた。

今年の正倉院展は、心配していたのだが、事前予約制での開催が決まり、私もさっそくオンラインで申し込みを行った。しかし、休日の時間帯はすでに売り切れで、平日朝の時間しか空いていなかった。指定時間に訪れた会場内は、例年と同じく多彩な宝物の数々が出陳されていたが、人数制限のために混雑がなく、宝物の一点一点をじっくり鑑賞する機会に恵まれた。メディアでも話題になったように、天平勝宝８年（756年）、光明皇后が、聖武天皇の遺愛の品々と合わせて、東大寺の盧舎那仏（るしゃなぶつ）に献納した薬物８件が今年の見所だ。「五色龍歯（ごしきりゅうし）」「大黄（だいおう）」など、献納された薬物の数々は、病に苦しむ人々に分け与え、その苦しみを救うことを願ったものだった。

このほか、御甲残欠（おんよろいのざんけつ）、漆葛胡禄（うるしかずらのころく）、梓弓（あずさゆみ）、鞆（とも）、鉾（ほこ）、馬鞍（うまのくら）など、武器・武具がまとまって出陳されたのも今回の特徴で、とくに、金銅鈿荘大刀（こんどうでんかざりのたち）のデザインの精巧さが目を引いた。当初、献納宝物の６割以上を占めていた武器・武具類は、ほとんどが天平宝字８年（764年）の恵美押勝（えみのおしかつ）の乱を平定するために宝庫から出され、戻ることがなかった。同じ盧舎那仏に献納された品々ながら、薬物は病との闘いに用いられ、武器・武具は人間同士の闘いのために用いられたのだ。

このような感慨を味わいながら、奈良国立博物館の会場を後にして、今回は、東大寺に足を延ばすことにした。南大門や大仏殿の周辺は、昨年までのような外国人観光客の姿はないが、校外学習の児童・生徒などの集団が多く、結構な人だかりになっている。９月15日から再開された東大寺ミュージアムは、南大門の脇にあり、四月堂の千手観音菩薩像（平安時代・重文）、法華堂（三月堂）の伝日光・月光菩薩像（奈良時代・国宝）などの仏像群が展示室に居並んでいる。現在は、戒壇堂が修理工事中のため、堂内の有名な四天王像もミュージアムに集結していて、その偉容は圧巻だ。

ミュージアムで私が見たかったのは、明治40年（1907年）、東大寺金堂（大仏殿）の修理工事中に、盧舎那仏座像（大仏）の足元、須弥壇近くで発掘された大刀６口、銀製小壺、玉類などの宝物で、金堂鎮壇具として一括で国宝に指定されているものだ。なかでも金銀荘大刀２口は、平成22年（2010年）、保存処理のためのＸ線調査で「陽剣」「陰剣」の象嵌銘が発見され、『国家珍宝帳』に記載された「陰宝剣（いんのほうけん）」「陽宝剣（ようのほうけん）」と判明したことが有名だ。元興寺文化財研究所の研究員として、当時、一連の作業に携わった橋本英将天理大学歴史文化学科准教授によれば、寸法などの特徴も両者が一致するという。「陰宝剣」「陽宝剣」は、聖武天皇の49日の法要で他の宝物類とともに盧舎那仏に献納されたものの、なぜか３年後の天平宝字３年（759年）、宝庫から「除物」として取り出され、長きにわたって行方不明となっていた。それが、約1250年ぶりに所在が明らかになったのだが、盧舎那仏の足元に改めて埋納された理由については定かでない。しかし、『国家珍宝帳』に記載された他の武器類の多くとは異なって、少なくとも、人間同士の闘いのために持ち出されたのではなさそうだ。そうした使われ方を避けるために光明皇后が大事な刀を埋めたという穿った見方もあり、一理あるかもしれない。

ところで、正倉院展で見た宝物の金銅鈿荘大刀は、装具の金属部分も木質部分も製作当時の状態が保たれていた。これに対して、東大寺ミュージアムで見た鎮壇具の大刀は、長く土中に埋もれていた出土品（考古資料）なので、刀身の鉄は錆のために形が崩れ、鞘などの装具の木質部分はほとんど失われてしまっている。また、昨年の東京展「正倉院の世界」で公開された宝物・白瑠璃碗は、６世紀頃のササン朝ペルシアで製作されたカットグラスだが、鮮やかな透明感が保たれていて、製作された当時の姿を残している。一方、天理参考館所蔵の円形切子ガラス碗は同じくササン朝ペルシアの遺品だが、巽善信天理参考館学芸員がNHKの特集番組で解説したように、出土品なのでガラスの成分が溶け出して劣化が進み、輝きを全く失っている。

写真　正倉院展期間中は一般公開される正倉院正倉

このように、正倉院宝物の保存状態が素晴らしいのは、それらが一度も土中に埋もれることなく、校倉作りの宝庫の中で密閉されて厳重に保管されてきたからだ。正倉院の正倉は、平成10年（1998年）、「古都奈良の文化財」の構成資産のひとつとしてユネスコの世界遺産に登録されたが、その前年、国内法での保護を求める世界遺産の登録基準に従うため、急いで国宝に指定された経緯がある。正倉院の宝物そのものは、いずれも超国宝級の文化遺産だが、文化財保護法に基づく国宝指定は受けていない。もしそれらが、個別に国宝指定を受けていれば、奈良県の国宝数は、京都府、東京都を抜いて全国１位になる。